

学部・学科設置の理念

はじめに

聖学院は、1903年(明治36年)アメリカ合衆国ディサイプルス教会から派遣された宣教師による神学校の設立に端を発し、その後幼稚園、小学校、男女の中学校・高等学校ならびに女子短期大学(現在は本大学に統合)まで発展拡大し、1988年(昭和63年)に開学された聖学院大学をもって、キリスト教一環教育の文化総合学園の完成段階に到達した。聖学院大学はその後も拡大発展を続け、現在3学部7学科、大学院3研究科を擁している。本大学の特徴として、大学自身の明文化された理念を有し、それに基づいて運営されているだけでなく、すべての学部・学科がそれぞれ明確な固有の設置理念を持っていることである。

聖学院大学の理念

十カ条で構成されている前掲の理念は、大学の設置にあたり「聖学院大学理念検討委員会」によって審議、作成され、開学の準備はもちろん、教育、研究、行政等も全てこの理念に基づいて運営されている。

政治経済学部の設置理念

18世紀の後半、西欧市民社会の成熟期にあたり、初めて社会科学としての経済学が成立したとき、それは政治経済学(ポリティカル・エコノミー)として構想されたが、爾来、科学技術のめざましい進展の過程で、技術的にも社会的にも分業が進み、これに対応する学問も細分化、専門化の一途をたどってきた。しかし、今日の社会は、過度に専門化された知識を持ってしては、かえってその現実の態様を捉えることができにくくなってきている。巨大な総合的有機体としての現代社会の認識のためには、高度に専門化された知識を生かしつつ、学際的な総合による把握が不可欠となっている。

ここに統合学部としての政治経済学部が構想された。キリスト教思想の伝統においては、ポリティックス(政治学)とエコノミックス(経済学)とは分けられず、広い意味でのエシックス(倫理学)として捉えられていた。この統合は、今この新しい社会状況の中で、現代的妥当性を持って再現されるべきであると考えられる。

1) 政治経済学科の設置理念

日本は現在、他の国々と相携えて秩序ある世界経済の発展に貢献する責任をますます大きく背負う立場にあり、欧米先進諸国とイコール・パートナーとなるに至っている。一方国内的には、都市化・工業化・民主化・情報化の波は日本の地域社会をも、国際的変化に直接運動させる結果をもたらし、

日本社会を大きく変えつつある。このような社会変動の渦の中で、一方での科学技術の国際化と他方国際関係の理解や、協応の実をあげるためには、国内外を問わず、政治経済が新たに重要な意味を持ってすぐに至り、実社会の第一線で働こうとする人材の教育には、政治経済の統合された知識が不可欠となってきた。

そこで本学科では、国際的視野に立つ知識や教養を重視する立場から、まず語学教育を重視する。また、キリスト教世界に属する諸外国の政治経済を中心とする地域研究を進める一方で、日本やアジアその他の国々の地域研究を行い、両者を比較考量する知識を授けるとともに、本学が立地する埼玉県が日本の中でも最も典型的に都市化、高齢化、就業人口の急増化、階層変化等が急速に進みつつある地域だけに、このような社会変動政治経済の局面において捉え、また社会学的、行政的、法的な観点からも考察する。

人文学部の設置理念

人文学部は古い伝統をもつ大学の「人文学」と呼ばれる学問研究を継承する学部であるが、現代のモダナイゼーションとグローバリゼーションは古いフマニタスの概念に新しい含蓄を与え、人文学部の新しい妥当性をもたらした。「人間」への関心は、新しい文化形成に深い関わりを持っている。

本学は、プロテスタント・キリスト教の文化伝統を受け継ぐ大学として、欧米文化の研究的教育的継承を課題とする欧米文化学科とプロテスタンティズムの日本到来が惹き起こした日本文化との出会いの結果として日本文化を新しい視点から研究し教育する日本文化学科を擁し、人文学部を構成するものとした。そして、さらに 2018 年度から、児童学科を人文学部に設置することとした。人文学部児童学科は、その前身を人間福祉学部に置いていたが、もともとは女子聖学院短期大学児童教育学科を母体に平成 4 年に聖学院大学に新設された人文学部児童学科であった。今回、文化創造の営みである教職課程を、文化継承研究と並ぶ人文学部における教育研究の主軸の一つに据え直すにあたり、位置づけし直したものである。

1) 欧米文化学科の設置理念

時代の趨勢である国際化に対処し、本学はその自らの存立が根ざすプロテスタント・キリスト教の伝統の精神及び文化を継承しつつ、それを研究・教育する「欧米文化学科」を開設する。このことは、あたかも心臓が血流をもって生命体を生かすように、学校法人聖学院の内的要求である。また本学科は、日本国憲法によって規定され、しかもわが国が共有していることを世界に公言しているところの、いわゆる欧米西側文化価値を正しく理解し、それをもって国際社会に貢献し得る人材の養成に取り組むことを目的とする。

欧米文化はその本質において「キリスト教文化」であるから、その精神的核心であるキリスト教の理解から欧米文化を探求させる。また英語教育には特に力を入れ、集中的に学習させる。

歴史を縦軸とし、比較研究を横軸として国際文化関係、文化グローバリゼーションを探求する。また歴史、社会思想、文学、芸術、宗教、近代化論などを通して、ヨーロッパ文化、アメリカ文化をそれぞれ

れ統合的に把握する訓練を与える。

2) 日本文化学科の設置理念

欧米のキリスト教文化の到来が惹き起こした日本文化との出会いは、単なる文化の比較論によっては捉えられない深い次元での文化接触であり、それは新しい日本学を要求するものである。今や日本文化の研究は、単なる多元主義による自家文化の特殊性の擁護や主張に留まることもできない。むしろグローバルゼーションという文化地平が拡大してゆく中で、自家文化の特色を自覚しそれを新しく人類文化の文脈の中で理解し、新しい文化交流へと生かすという、「日本学」が要求される。日本文化学科は、この新しい文化グローバルゼーションというコンテクストにおける日本学に取り組む。本学科は、日本文学のほか、広く歴史、宗教、思想、芸術など、ひろく視野を拡大して、日本文化の新しい見直しと統合の方向を模索する。また本学科は、近隣の東北アジアとの文化交流を視野に入れつつ新しい日本学を展開していく。

3) 人文学部児童学科の設置理念

今回新たに、文化創造の営みである教職課程を、文化継承研究と並ぶ人文学部における教育研究の軸の一つに据え直すにあたり、児童学科を人文学部に設置することとした。人文学部児童学科は、これまでの実績の上に、学科のディプロマ・ポリシーに基づき、児童英語をはじめとする言葉の技能を身につけ、倫理観ある専門性を備えた幼稚園教諭、小学校教諭、特別支援学校教諭、保育士の養成を主たる目的とする。児童英語、インクルーシブ教育、子ども・子育て支援等の今日的課題を人文学的基礎のもとに探求し、キリスト教的人間理解と児童学を土台としながら人格として児童を理解する器量を備え、多様な教育課程・支援課題に臨み解決に向けた取り組みのできる教員・保育者等を育てる。そして、言葉の力を信頼し、言葉を受け止める力と言葉に拠って思考する力を身に付け、さらに言葉を媒体に他者を理解し他者とつながることのできる真のコミュニケーション能力を生かして一般公務員・一般企業等で飽食奉職する幅広い職業人も養成する。

人間福祉学部の設置理念

本学部は、現代日本において、ただ単に目を過去に向けるだけでなく、その文化遺産を継承して、「神を仰ぎ、人に仕う」という聖学院のスクール・モットーに則り、それを現代の必要に応じて展開することを目途とする。現代において新しく開けてきた人生の2つの問題領域として、少子化によって開示された分野と、急速な高齢社会化によって開示された領域とがある。児童学科は、前者の問題領域に対応して新しい「児童文化」の形成を試み、こども心理学科は、同じく前者に対応して寄り添いと共生を主眼とする新しい「奉仕文化」の形成を試み、人間福祉学科は、その後者に対処して長寿社会における新しい「福祉文化」の形成を目指す。この3学科をもって、人間福祉学部を構成するものとした。

1) 人間福祉学部児童学科の設置理念

元来児童の問題は広く人間全体の問題関心のコンテクストにおいて捉える必要があり、それ故それは深く人間学的基礎において取り組まれるべき課題である。本学は人間福祉学部の中に児童学科を設置し、これらの問題と学術的、教育的に取り組む、将来の社会の担い手として社会の希望としての児童の育成に広く貢献すべきと考える。この目的のため、本法人の伝統的遺産であるキリスト教的人間理解、児童観、ならびに家庭観を生かしつつ、併せて新しい児童の研究を発展させ、その関連で幼児教育者の養成を新しく展開していくことは、日本社会における本法人の教育的学術的使命である。

本学科はキリスト教による児童理解の確立を目指す。キリスト教教育論、キリスト教幼児教育特講などによって、児童の人間形成における宗教の意義について考え、キリスト教の人間観、児童観をとおして、人間形成の本質を見みきわめる力をつけさせる。また児童を、その生活と文化、成長と発達、教育および福祉などの視野から総合的に研究し、新しい総合的児童研究の確立を図る。そのために、児童文化系統、心理学系統、関連系統を設ける。また生涯の専門職としての幼児教育者の育成のため、特に音楽教育に力点を置く。

2) こども心理学科の設置理念

現代において、心身の問題、また発達障害などの課題を抱えているこどもたちがいる。本学では日本社会の明日を担う時代のこどもたちの精神的課題の突破口に光を当てるためには、専門的に心理学の課題と取り組まなければならないことを自覚するに至った。そこで、十分な専門的基礎の上に立ってこの現代的課題と取り組む学科を設立することとした。

また近年発生した大災害に起因した短期および長期にわたる心理学的課題を負うこどもたちをはじめ、心身ともに多様な困難さの中にあるこどもたちに対する心理学的ケア・サポートを実践する機会を提供し、その体験を通して共感性を持った社会的貢献のできる人材を育成する必要も、これからの課題だと考える。

本学科では、心理学の専門知識や技能に基づき、こどもの発達を心と身体とそれを取り巻く環境・文化という3つの側面から学ぶ。こどもを幼児や児童に限定せず、個体発生から青年期に至る期間を“こども期”と捉え、この広範な“こども期”にある人々の心身のケア・サポートを提供する上で不可欠な、心理学各分野の基礎的な知識や技能と、健康の維持増進に関する基礎的知識、多様で複雑な事象を客観的に捉える科学的な態度を十分に習得できるよう計画する。

スピリチュアルなものに目を向け、他者に共感し寄り添うことができる人材の育成を目指す。また、こどもの人格・人権を十分に尊重することができるゆるぎない価値観と深い人間理解の基盤を形成し、各々、その価値観に基づいて社会貢献ができる有為な人材の育成を目指す。

3) 人間福祉学科の設置理念

福祉は人間の根本欲求であり、人権の内容を規定すると同時に、社会の性格をも規定する。それは

日本国憲法第 25 条に表現されている。この憲法の理想は、福祉文化の基盤整備なしに、空文となる。福祉は、文化の成熟度の指標だからである。福祉文化形成は、福祉社会として制度化されねばならない。

17 世紀ピューリタン革命の時、「人民の福祉が最高の法なり」との古いストア的格言が新しくキリスト教的含蓄を持って主張された。それは福祉的人間の自覚と福祉による社会の再構築の意思とを生み出した。それは現代日本の社会的課題でもある。人間福祉学科は、このピューリタニズムの伝統を継承し、現代に生かすことを企てる。

福祉社会の形成は、国家のすぐれて政治的行政的課題である。しかし、またそれだけでなく、福祉社会がしかるべき人間的基礎を要求するものであるかぎり、それは教育の課題でもある。福祉社会がいかなる制度的形態をとるべきか、本学はそれを教育の課題として受け止める。

福祉文化人、もしくは福祉人は、福祉社会の人間的基礎である。福祉人の養成なしに、福祉社会の形成は無い。本学科の使命は、福祉文化の担い手たる福祉人の養成である。そのような人間の必要は、社会福祉という特定の分野に限定されるべきではない。社会のいたるところで、福祉人は、社会を福祉社会へと膨らませるパン種と成る人間とならねばならない。

しかし本学科は、福祉文化の担い手としての基礎教養を備え、社会福祉の現場で働く専門職の養成という具体的焦点を併せ持っている。精神なき専門人でなく、精神だけで専門的訓練のない心情家もなく、福祉人という人間的基礎を持った福祉士である「精神ある専門人」を養成することを目指す。

心理福祉学部を設置理念

本学部の前身である人間福祉学部は、プロテスタント・キリスト教の精神に立って福祉社会の形成を探究する学部として、平成 16 年(2004)、同文化の継承を探究する人文学部から分離独立して開設された。今般、人間福祉学部児童学科の廃止と人文学部児童学科の設置にあわせ、人間福祉学部に残るこども心理学科と人間福祉学科を統合し、心理学と福祉の両面から、現代人の心の問題と現代社会の福祉的課題について学ぶ心理福祉学科を設置することとした。あわせて、一学部一学科となることから学部名も心理福祉学部と改めることとした。

心理福祉学部においては、現代人の心の問題と現代社会の福祉的課題に関する専門的な知識を修得させ、プロテスタント・キリスト教の精神に基づく本学の理念「神を仰ぎ、人に仕う」のより具体的な目標である「良き隣人となる」人材の育成をめざす。

1) 心理福祉学科の設置理念

心理福祉学科においては、現代人の心理および現代社会における福祉的課題に関する専門的な知識を修得させ、現代社会に生きる人びと、特に日常生活において身体的・精神的な支援を必要とする人びとの心理・社会的課題を理解し、共感し、支援する能力を修得させる。そして、そのことを通して、「良き隣人」として福祉社会の実現に寄与する人材の養成、さらには心理学及び福祉学の専門知識をもって総合的に支援する専門職の養成を目指す。